

26P-am101

炎症性大腸炎粘膜中の炎症細胞に及ぼす EGCG の効果

○望月 美也子¹, 長谷川 昇¹(¹岐女大院生活)

【目的】

(-)Epigallocatechin-3-gallate (EGCG)は、緑茶の機能性を特徴づける成分の1つであり、他の緑茶カテキンと比較して強力な生理活性作用を示している。われわれは既に、EGCG による炎症性腸疾患緩和効果(J.Health Sci. 51, 362~364, 2005)および緑茶カテキンの 2,4,6-trinitrobenzene sulfonic acid(TNBS)による炎症性大腸疾患に及ぼす炎症軽減効果(第124年会,大阪)について明らかにしている。

そこで、本研究では、TNBS の腸内投与によって惹起させた大腸粘膜内の免疫細胞に及ぼす EGCG の効果を明らかにするために行われた。

【方法】

オス SD ラットを用い、EGCG をあらかじめ10日間ゾンデにて投与した。炎症性腸疾患は、TNBS を直腸内投与することによって惹起させた。

12時間後、炎症部位の粘膜の程度を評価した後、炎症部位粘膜を剥離し、好中球浸潤の指標である myeloperoxidase(MPO)を測定した。同時に、炎症部位のヒスタミン量も測定した。

【結果および考察】

EGCG は、濃度依存的に炎症の程度および MPO 活性を抑制し、ヒスタミンの放出を抑制することが明らかとなった。

以上の結果から、EGCG は、mast cell の活性と好中球の浸潤を抑制することが明らかとなった。